

『ドイツ語文化圏研究』 第20号 抜刷  
2024年2月20日発行

(研究ノート)

カール・ファレンティンの『少年時代の悪戯』について  
——1900年頃のミュンヘン郊外の子供の情景——

**Über die „Jugendstreiche“ von Karl Valentin  
Kinderszenen um 1900 in der Münchner Vorstadt**

宮内 伸子

**Nobuko MIYAUCHI**

日本独文学会北陸支部

(研究ノート)

## カール・ファレンティンの『少年時代の悪戯』について ——1900年頃のミュンヘン郊外の子供の情景——<sup>1</sup>

宮内 伸子

### はじめに

ミュンヘン出身の自作自演の寄席芸人カール・ファレンティン (Karl Valentin, 1882-1948) が自らの子供時代を振り返って書いたのが、『少年時代の悪戯』(Jugendstreiche) である。本稿ではこのファレンティンの自伝的作品を手がかりに——テキストからの引用を交えつつ抄訳的に紹介することで——彼の子供時代に思いを馳せるとともに、19世紀末から20世紀初頭にかけてのミュンヘン郊外で繰り広げられた小市民階級の子供の情景・遊びの世界をうかがってみたい。ちなみに、ヴァルター・ベンヤミン (1892-1940) に『1900年頃のベルリンの幼年時代』という回想録があるが、ミュンヘン郊外の職人層とベルリンの富裕なユダヤ人知識層とでは子供の情景も同時期とはいえ大きく異なるようである。そのような事も念頭に置くといっそう興味深いかもしれない。

### 1. カール・ファレンティンについて

カール・ファレンティンは1882年にミュンヘン郊外のアウで生まれ、<sup>2</sup> 1948年にミュンヘンで亡くなった自作自演の寄席芸人・コメディアンである。一人語りや相方リースル・カールシュタット (1892-1960) との掛け合いを中心に、自作の演目で20世紀の10年代から30年代にかけて大変な人気を博した。主にミュンヘンで活動したが、時にベルリンやチューリヒ、ウィーンでも客演した。作品の

---

<sup>1</sup> 本稿は日本独文学会北陸支部研究発表会 (2022年11月19日、於：福井) での口頭発表「Karl Valentinの『Jugendstreiche』について」に修正を加えまとめたものである。

<sup>2</sup> ファレンティンは生粋のミュンヘン人あるいはバイエルン人と思われがちだが、父はヘッセンのダルムシュタット出身、母はザクセンのツィッタウ出身で、両親ともプロテスタントだった。

数は400余と言われるが、その多くに独特の言葉遊びが見られ、それが大きな魅力になっている。<sup>3</sup>

若い日のベルトルト・ブレヒト(1898-1956)もファレンティンに興味を持ち、影響を受けた。ブレヒトがファレンティンと並んでラッパを吹いている写真がブレヒトの伝記にしばしば掲載されている。ブレヒトの他にもアルフレート・ケル(1867-1948)、フランツ・プライ(1871-1942)、ヘルマン・ヘッセ(1877-1962)、クルト・トゥホルスキー(1890-1935)といった同時代の文人たちがファレンティンを高く評価していた。

第二次大戦後ほどなくして亡くなったこともあり、戦後は忘れられた存在になっていたが、1960年代に入って再評価が始まり、作品が演じられたり、作品集や関連の書籍が出版されるようになった。1990年代には全8巻から成る校訂版も刊行された。またファレンティンは自らのパフォーマンスを記録することにも力を注いだため、映画や音声が少ないから残されている。<sup>4</sup> それらがその後の記録メディアの発達に応じてテープやDVDなどに移されていき、今ではいくつかの作品をYouTube等の動画投稿サイトでも見ることができる。

ミュンヘンのイーザル門に、ファレンティンの記念館がある。1959年にValentin-Musäum<sup>5</sup>として設立されるもので、筆者も35年程前に一度訪れたことがある。その後2001年にリースル・カールシュタットの陳列室がオープンし、それを機にValentin-Karlstadt-Musäumとなった。ファレンティンのコメディにおける相方リースル・カールシュタットの役割の大きさを考えれば、この館名変更にも異を唱える人はいないだろう。<sup>6</sup>

---

<sup>3</sup> ファレンティンの言葉遊びを論じた日本語論文には、拙論「カール・ヴァレンティンの言葉遊び」などがある。

<sup>4</sup> ファレンティンはチャーリー・チャップリン(1889-1977)、ハロルド・ロイド(1893-1971)、バスター・キートン(1895-1966)、マルクス兄弟(最年長のチョコが1891年生まれ)ら無声映画がトーキーに変わっていく頃の英米の喜劇役者たちと同時代人である。ファレンティンは「ドイツのチャップリン」と呼ばれることもあった。

<sup>5</sup> Musäumという綴りはバイエルン方言の発音に合わせたものである。

<sup>6</sup> リースル・カールシュタットは実質的にファレンティン作品の共同作者・共同監督であり、さらには神経質なファレンティンの精神的ケアも担っていたことなどが、女性の社会的地位の向上とともに次第に認知されるようになったという背景がある。

## 2. ミュンヘン郊外のアウ地区について

ファレンティンが生まれ育ったアウ地区は、ミュンヘン旧市街の南東部に位置する。ここが『少年時代の悪戯』の舞台である。

アウ地区は 1854 年にミュンヘン市にすでに組み込まれていたが、19 世紀末になっても田舎っぽさがまだ残る地域で、住民は零細な小売り商人や職人、行商で生計を立てる退役軍人等いわゆる小市民だった。その多くが貧困層で、失業率も高く、物乞いをする人も少なからずいたらしい。また、いわゆる奇人変人のたぐいも多く、ファレンティンのグロテスクな人間への偏愛はこのような環境で育まれたといえる。<sup>7</sup>

アウ地区の住民の評判は 20 世紀に入ってから芳しいものではなかった。ミュンヘン人のゆったりとしてゲミュートリッヒな感じはなく、アウ者は喧嘩早く、破廉恥・粗野・軽率などと悪口を言われた。特に悪名高かったのは、アウの音楽師たちで、ドイツ中を巡業して回り、乞食のようなことをしていたらしい。<sup>8</sup>

アウの住民には髪や目の色の濃い人が多かったが、これは何百年も前からフランス人やイタリア人、トルコ人がこの地区に移り住んでいたためのようである。とはいえ、全般的にはミュンヘンの他の郊外地区と社会構造的に大きな違いがある訳ではない。ただ、アウには芝居好きが多く、家に芝居小屋を設けることがしばしば見られた。<sup>9</sup>

ファレンティンも子供の頃から芝居に親しんでいた。『少年時代の悪戯』の「心底好きなこと」という章の中に、父親の店が所有する家具運搬車を舞台に仕立て、その前の地面に観客用の椅子を並べて、ゲーテの『ファウスト』を上演したエピソードが紹介されている。『魔弾の射手』を上演したこともあり、その時ファレンティンは舞台下にもぐって煙を出す役を務めたのだが、煙を舞台上へ送り出す穴を見つけられず、充満した煙で死にそうになったそうだ。

## 3. 『少年時代の悪戯』について

『少年時代の悪戯』は、ファレンティンが子供時代を振り返って書いた一種の

---

<sup>7</sup> Vgl. Schulte (1982): S. 14.

<sup>8</sup> Vgl. Schulte (1982): S. 16.

<sup>9</sup> Vgl. Schulte (1982): S. 16.

自伝である。主に第二次大戦中に執筆された。<sup>10</sup> 執筆にあたりルートヴィヒ・トーマ (1867-1921) の『悪童物語』(1904) を手本にしたとされる。トーマのこの小説は、日本では夏目漱石の『坊っちゃん』(1906) を思い出す人もいるほど主人公の少年の振る舞いが痛快なのだが、ファレンティンの『少年時代の悪戯』は痛快というには悪辣振りが目に余るところもあり、トーマの『悪童物語』よりむしろ中世の民衆本『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快的悪戯』を思わせるのではないか。主人公が悪さをして懲らしめられることがあまりない点も、オイレンシュピーゲルの物語と似ている。過激な悪戯という点では、ヴィルヘルム・ブッシュ (1832-1908) の『マックスとモーリッツ』(1865) も彷彿とさせる。

このファレンティンの悪戯物語を下敷きにして、1977年に *Die Jugendstreiche des Knaben Karl* というタイトルで映画も制作された。<sup>11</sup> 映画化の際、曾孫 (次女ベルタの孫) の1人も主演のオーディションを受けたものの採用されなかったと、長女ギーゼラが自らの伝記の中で語っている。<sup>12</sup>

『少年時代の悪戯』はいろいろな形で出版されていて、収録エピソード数や章分け、表現や文言に多少の異同が見られる。ルートヴィヒ・グライナー<sup>13</sup> がファレンティンの依頼で描いたという挿絵付きの版もある。また近年 2020 年にも新たにペーパーバック版が刊行されている。<sup>14</sup> 本稿では、ファレンティンの次女ベ

---

<sup>10</sup> ただし、ファレンティンの2人目の相方アンネマリー・フィッシャーは、1920-30年代にすでに新聞や雑誌に掲載されたエピソードもあると書いている。Vgl. Fischer-Grubinger (1982): S. 108. 校訂版全集の解説によれば、ファレンティンは1920年代に子供時代の思い出をメモに取り始め、30年代にエピソードを単発的に発表し始めたらしい。Vgl. Bachmaier/Faust (1996): S. 314.

<sup>11</sup> 監督・脚本：フランツ・ザイツ、主演：ローベルト・ザイトゥル。

<sup>12</sup> Freilinger-Valentin (1988): S. 166. 長女ギーゼラは母方の祖父母の下で育てられたことや次女ベルタのように積極的に発言することもなかったため、存在がほとんど知られていなかった。ギーゼラの伝記本のカバーの宣伝文句には *Karl Valentin hatte also zwei Töchter!* とあり、新聞の書評欄の見出しは *Die nun nicht mehr Verschwiegene: Karl Valentins ältere Tochter erinnert sich an den Vater* (Süddeutsche Zeitung, 1988年10月19日) とある。

<sup>13</sup> Ludwig Greiner (1880-1956)。グライナーは宿屋の主人でファレンティンの長年の友人。美術の専門教育は受けていないが、絵が上手だったのでファレンティンのために舞台装飾や挿絵を描いた。しかし最大の功績は、ファレンティンにその瘦身を喜劇に活かすことを勧めた点にある、とシュルテは述べている。Schulte (1982): S. 29. ちなみに、グライナーの絵のタッチは、ケストナーの児童書の挿絵画家ヴァルター・トリーアのタッチに似ている。

<sup>14</sup> Paulsen, Alix (Hrsg.): *Karl Valentin. Meine Jugendstreiche*. Husum: Husum Verlag, 2020.

ルトル（ベルタ）が編んだ、グライナーによる挿絵 70 枚入りの版を使用テキストとする。<sup>15</sup> このテキストは下記の 14 章構成で、計 98 篇のエピソードを収めている。<sup>16</sup>

- (1) 「冬の悪戯」 5 篇
- (2) 「爆発的効果」 6 篇
- (3) 「畜生道」 10 篇
- (4) 「アウの恐怖」 10 篇
- (5) 「今日は喧嘩だ」 5 篇
- (6) 「サーカス万歳」 5 篇
- (7) 「母の心配」 6 篇
- (8) 「学校物語」 8 篇
- (9) 「消防隊ごっこ」 4 篇
- (10) 「うさん臭い話」 5 篇
- (11) 「下劣な行為」 14 篇
- (12) 「心底好きなこと」 13 篇
- (13) 「最高記録」 4 篇
- (14) 「パレード開催中」 3 篇

以下、ファレンティンの『少年時代の悪戯』からエピソードの数々を紹介していく。<sup>17</sup> そうすることで、ファレンティンにとってパラダイスだった少年時代に思いを馳せながら、1900 年頃のミュンヘン郊外で繰り広げられた子供の情景・遊びの世界を思い浮かべてみたい。

---

<sup>15</sup> Valentin-Böheim, Bertl (Hrsg.): Karl Valentin. Die Jugendstreiche des Knaben Karl. Mit siebenzig Zeichnungen von Ludwig Greiner. München: Piper, 1986. グライナーによる挿絵はファレンティンの悪戯を具体的にイメージするうえで大きな助けとなった。

<sup>16</sup> 使用テキストには章番号は付されていないが、論を進めるうえでのわかりやすさを考えて原本の目次掲載順に番号を振った。

<sup>17</sup> 98 篇いずれのエピソードも捨て難かったが、紙幅の制限があるため、本稿で紹介できたのはその約 3 分の 1 である。エピソードの選択に際しては、ファレンティンや当時の遊びのいろいろな面が伝わるように心がけた。

## (1) 「冬の悪戯」

先頭のこの章には冬ならではの悪戯のエピソードが5つ集められている。冒頭を飾るのは、アウで16世紀から為されているという「老婆束ね」という伝統ある悪戯である。

クリスマスミサでの「老婆束ね」はアウに古くから伝わる風習で、アウの年寄りたちが今でも語っているところによれば、16世紀にはもう始まっていたらしい。マリーエン広場の魚の噴水での財布洗いのようにすごく楽しいものである。(S. 7)<sup>18</sup>

自分たちの代で伝統を絶やしてはならじと、ファレンティンはクリスマスイブに家から洗濯ロープを持ち出して、悪友たちとミサ中の教会にもぐり込む。そして参列している年配の婦人たちの周囲をロープで囲んでしまう。そんなことをされたとはつゆ知らず、ミサが終わって帰ろうとした老婦人たちが押し合いへし合いの大混乱に陥る。

イーザルベルクでの橇滑りも冬の楽しい遊びの1つである。放課後すぐに滑り始めて、暗くなるまで繰り返して斜面を滑り降りる。それもファレンティンが家から持ち出してきた家具運搬用の馬橇に20人、30人もが乗り込んで豪快に滑るのだ。時に勢いあまって、凍った川にまで突っ込んでしまうこともあるが、幸いにもけが人は出なかったという。しかし、それはただ運が良かっただけで、友人と遊んでいて2人とも氷の下に落ちてしまい、友人は命を落とし、ファレンティンは宿病しよくびとなる喘息を得たという別の事件も起きている。

後のコメディアン、カール・ファレンティンの萌芽を感じさせるエピソードもある。ミュンヘンの英国庭園にあるクラインヘッセローアー湖が氷結するとファレンティンは出かけていく。彼は最初まったくスケートを滑れない風を装って、滑稽な身振りでさんざん居合わせた人たちを笑わせたあげく颯爽と滑り去る。

足にズボンを凍りつかせて母にいつもの台詞を言う。「母さん、怒らないで、

---

<sup>18</sup> テキストからの引用は頁番号のみ引用末尾に記した。

どうしようもなかったんだ。トニーに突き落とされたんだよ！ 母は頭を振っただけで、乾いた服を出してくれた。(S. 11)

イーザル川での流氷乗りの顛末である。氷に1人で乗って川下りをするだけでは物足らなくなると、別の少年の乗る氷に飛び移ってみる。すると、氷は2人分の重みには耐えられず、たいてい2人とも水中に落下してしまう。上の引用部は、ずぶ濡れになって帰宅したときの優しい母親の反応を示すくだりである。

## (2) 「爆発的效果」

2 番目の章は、花火や爆竹を使った危険な遊びにまつわるエピソード 6 篇から成る。「僕が今日まで生きているのはほとんど奇跡に近い」と、この章は始まる。危険な悪戯をそれほどやらかしたのである。

町の変人奇人がファレンティンたち悪童の標的にされることもあった。その男は酔っ払って居酒屋に出入し他の客達にいつもからかわれているので、悪ガキたちの格好の餌食となり、ポケットの中にネズミ花火を入れられるというひどい目に遭った。

凧揚げもファレンティンたちの愉快的遊びの1つだった。凧はもちろん手作りだ。細板と薄紙を材料に高さ2メートルもの凧を作って空に泳がせる。そのうちふつうに凧揚げするだけではつまらなくなり、凧に花火と爆竹を取り付けて、上空で爆発させることを思いつく。凧はもちろんバラバラに壊れてしまう。時には夜にこの花火付き凧揚げをすることもあった。凧が飛び散る様子がとてもきれいなので、ファレンティンは、憎らしい学校の先生たちを凧で空に揚げられたらなあ妄想する。

ファレンティンが8歳の頃、父親がある伯爵からブードル犬を褒美にもらったことがあった。可愛い可愛いと夢中になったのは最初の10分間だけで、飽きてしまったファレンティンは、犬の尾にネズミ花火を結わえつけた。可哀想な犬は驚いて駆け出し、そのまま行方知れずとなった。このエピソードの他にも『少年時代の悪戯』には動物が関係するものがかかなりある。当時は生活の場において、虫や鳥も含めて動物が現代よりもずっと身近だったのだろう。



### (3)「畜生道」

3つ目の章はそのような動物絡みのエピソード集となっている。10篇収録されているが、やはり人間に一番身近な犬の話が4つで最多である。

人間はこの世に生まれてくるとき、どうにもまだ不器用なため自力では出て来られない。そのために産婆が存在するのだ。「マイヤーさんを急いで呼んできて！」こう言うだけでみんな何事かわかる。1895年は大変な子沢山の年となった。産婆の家の呼び鈴——アウでよくお目にかかるものだが——が少なくとも週に1度は鳴った。それどころか、日に5度も6度も鳴らされることさえあった。(S. 21)

産婆の家の呼び鈴に豚の骨を結わえつけるのである。通りがかった犬が皆その骨めがけて飛びつくので、アウの出生率が異常に高い訳でもないのに産婆の家の呼び鈴が日に5回も6回も鳴ってしまう。

ハーメルンの鼠捕り男の後ろを鼠たちは付いて行った。この話はよく知られているが、ハルファー家具工場のシュヴァーベン人の職人 H・シュレーゲルの後ろを犬たちが付いて行ったことはあまり知られていない。しかし、これもやはり歴史的に裏付けられている事実である。ハーメルンの鼠捕り男はあの小さくて可愛い動物を笛でおびき寄せたけれど、こちらの職人は犬の毛の詰まった小箱を持っただけである。ただしその犬の毛というのがうちの雌の番犬ロッテのおいどの毛だったのだ。(どこの毛かちゃんと伝わったろうか!) (S. 23f.)

ハーメルンの鼠捕り男ならぬ、犬につきまとわれた可哀想な職人の話である。なぜそんな事態になったかという、ファレンティンたちが雌犬のお尻の毛を職人の上着のポケットにこっそり忍び込ませたからだ。職人がお昼を食べに通りに出たところ、1匹、2匹と犬が寄ってきて、ついには20匹ほどがまとわりつくという騒ぎになる。食堂に逃げ込んで、これでやっと助かったかと思いきや、2時間後に外に出てみたら、犬たちがまだ待っていて哀れな職人は大歓迎を受けた。

アヒルも悪童たちに悪戯を仕掛けられる。固くなったパンのかけらを餌にして、アヒルを釣るのだ。「釣る」といっても、そのパンが紐付きと知らずにバクリと呑み込んだアヒルの喉から、紐を引いて再度パンを引き出し、それを何度も繰り返すだけである。そんなことをしておきながら、「アヒルが美味しいのは知っていたけど、こんなにバカとは知らなかった」などとファレンティンはうそぶく。このエピソードはまさに『マックスとモーリッツ』の悪戯を思い出させる。

酔っ払いは時として不愉快である。(飲み助たちを怒らせないために、「時として」と強調しておく!) 不愉快ではなく、苦しくなるほど滑稽なのは、ビールに漬けたパン屑で酔っ払ったニワトリたちである。(中略) もしこれが愚かな生き物の仕草でなかったなら、「神々のための眺め!」と言ってもよかったろう。(S. 26)

ビールに浸したパンをニワトリに与えて、酔ったニワトリのおかしな仕草を楽しむという悪さである。Ein Anblick für Götter! (実に滑稽な見もの、の意もあり) だったようだ。

蜘蛛もまたファレンティンたちの悪の手を逃れられない。そのエピソードは「スペインには鬮牛がある、ドイツないシアウには鬮蜘蛛があった」と書き始められ、鬮蜘蛛のやり方を事細かに記す。そして最後に、鬮牛の場合と同じく残酷なのは蜘蛛ではなく、それをさせる自分たちの方だったと認めている。

僕の子供らしい想像力に火が付いた。すぐに僕は小さなギロチンをこしらえた。工作は得意だった。その首はね装置は、新聞で見た本物とそっくりに作った小型版だった。僕らはまずロウ人形の首をはねてみた。けれどもそれはたいして面白くなかった。オスカルと僕はそれでは物足らなかつた。(S. 29f.)

新聞で死刑執行の記事を読んだ 10 歳のファレンティンはギロチンに夢中になってしまう。工作はお手のものだったので、ミニチュアのギロチンを手作りする。最初はロウ人形の首をはねていたのだが、結局 10 匹のネズミが犠牲になった。

#### (4)「アウの恐怖」

悪戯者のファレンティンは、アウでは相当恐れられていたらしい。女の子のお下げ髪をつかんで鞭を振るったり、古い兵舎の窓ガラスを巨大なパチンコの的にして割ったり、やりたい放題である。この章では10のエピソードが語られる。

ナイフ投げという危険な遊びのエピソードもある。時にナイフが仲間の膝に当たったり、頬をかすめたりして、けが人が出ることがある。けがをした少年は泣きながら家に帰るが、誰もが口々に、やったのは僕じゃないよと言うので、やった者はいないという理屈になるらしい。

「刻印された者に用心せよ！」アウではこの箴言は「ファイ家の坊主に用心せよ、奴はお前たちに刻印するつもりだから」と言い換えられなければならないかったろう。僕に「刻印を入れられた」少年は30名を下らない。(S. 33)

入れ墨である。アウでは、ファレンティンにつかまると入れ墨をされてしまうと恐れられていた。父親の経営する家具運送店に船乗りだった男がいて、ファレンティンはタトゥーを知った。自分の腕にも彫ったが、30人ほどの少年が痛い思いをしてファレンティンに入れ墨を入れられてしまった。

イースターには教会ではなくマリアヒルフ広場に出かけて行って卵試合に精を出す。1対1で卵の先端をぶつけ合って、割れなかった方の勝ち。勝者は相手の卵を獲得できる。ファレンティンと悪友は石膏製の卵を使うという卑劣な手を用いる。それがばれて袋叩きにされる。

#### (5)「今日は喧嘩だ」

「火事と喧嘩は江戸の花」という言葉があるが、似たような感覚で、ミュンヘン郊外の少年たちは喧嘩早いのを格好良いことと心得ていたようだ。小競り合いは日常茶飯事、時には他地区を相手に双方合わせて200名にも上るような大きな喧嘩もあったらしい。この章では5つのエピソードが紹介されている。

横暴に振る舞うファレンティンには近所にももちろん敵がいた。両親のお使いで1人きりで出かける際が狙われやすい。そんな時はどうするか。いかにも無邪気そうな顔つきで大人に助けを求めるのだ。

きな臭い気配が漂うと僕は大人の男の人にくっついて行くことにする。「お願いです、一緒に行ってもいいですか。僕を殴ろうとするひどい奴がいるんです」と、上目遣いをしながらこのうえなく無邪気そうに頼む。すると同行が許される。——無事帰宅すると次の喧嘩で復讐してやるぞと誓う。次の喧嘩が起こらないことは決してない。(S. 42)

馬跳びを応用した、首の骨を折るかねない危険な悪戯もあった。野原で2人が組になって、その片方が何も知らない3人目の背後で馬を作り、もう片方が犠牲者の胸を突いて後ろに倒すのだ。これを20人30人が入り交じって始めると、もはや誰も安心して立っていられなくなる。年配女性にまで技をかけるに至って、学校が介入してきたという。

#### (6) 「サーカス万歳」

サーカスは当時の少年たちにとって非常に魅力的なものだったようだ。サーカスをめぐるエピソードが5つ綴られている。

テレーゼン・ヴィーゼの老舗サーカス「バヴァリア」に僕は魅せられた。午後の部の開始は4時だった。3時にはもう僕らアウの少年たちは出発した、徒歩で。全員がポケットに20ペニヒ硬貨をしのばせて。「さりげなく入っていく……！」と言うのは簡単だけど。かがんで歩くのは、それも感づかれないようにそうするのは一苦労だ。20ペニヒの子供用チケットを手に入れるためには「小さく」なければならないが、僕らはもう10歳や12歳の「半分若者」だった。だから膝をかがめて歩くのである。(S. 45)

子供料金でサーカス見物をするために、チケット売り場の前をかがんで歩いて背を小さく見せようとしている場面である。チケット売り場をうまく通過しても、もぎりのところでばれてしまうこともあり、そうすると今度は、「父さんが病気で働けなくて、母さんはお金がなくて、20ペニヒしかくれないんだよ」と泣き落としにかかり、それが功を奏することもある。どうにかもぐり込めた時は、翌日学

校で、見物したばかりの芸を級友たちに披露してやる。

1895年頃、ファレンティンたちはパラシュート降下というものをまだ知らなかったが、開いた雨傘を手に裏の建物の2階から中庭へ飛び降りるという遊びをしていた。着地点には古いマットレスを敷いてはいたものの、それでも時々けが人が出た。ファレンティンも顎を膝にぶつけて舌先を噛み切りそうになったことがある。雨傘のおかげで危険度は多少減じるかもしれないが、それでも勇気を要する行為であることに変わりはないというのがファレンティンの見解である。

### (7) 「母の心配」

ファレンティンの母親は感じやすく心配性の女性だった。ファレンティンは一人っ子のように育てられているが、実は2人の兄と1人の姉がいた。ただし3人とも小さいうちに病気で亡くなった。そのような事情もあって母親は残った一人息子を大切にしがやらかした。そんな母の気持ちを知ってか知らずか、ファレンティンは母親を心配させるようなことをわざとしてみせる。さすがにやり過ぎたと自分で気づくこともある。

指物師の徒弟をしていた時、仕事時間中に工房を抜け出して帰宅したことがあった。玄関をノックして、ドアを開けてくれた母に僕は血だらけの手を差し出した。「母さん、早く！ 旋盤に引き込まれた！」母は真っ青になり気絶しかかった。それで僕はやり過ぎたと感じ、「エイプリルフールさ！」と叫んで大笑いして、悪い冗談を朗らかなものに変えようとした。(S. 51)

### (8) 「学校物語」

ミヒャエル・シュルテによる伝記によれば、学校の授業はファレンティンにとっては懲役刑のようなものだったらしい。唱歌、図画、体操が得意科目で、算数は大嫌い。宗教の教師からはしばしばひどい体罰をくらったようである。<sup>19</sup>

学校に行きたくないものだから仮病をつかう。あるとき友達を誘って、小麦粉

---

<sup>19</sup> Vgl. Schulte (1982): S. 18. 一度などは宗教の教師にひどく殴られて家に歩いて帰ることもできないほどになり、その時は父親が教師に激怒して母親が止めなければ惨事が起きかねなかったというエピソードが『少年時代の悪戯』でも語られている (S. 61)。

を白粉のように顔にはたいて顔色を青白くし、病気に見せかけて、学校をずる休みしようと企てた。結果は、友人の方はすぐに仮病がばれてしまった。ファレンティンの方はまんまと母親をだませたものの、病気を本気にした母にカミツレ茶を飲まされて、これはこれで災難だったと記している。

「コオロギをここに持ち込んだのは誰だ？」と虫の音を聞きつけた宗教の教師が尋ねた。少年たちはにやにや笑ったが、僕だけは真面目な顔をしていた。誰も答えようとはしないので、聖職者は我を忘れて叫んだ。「もう一度聞くぞ。コオロギを持ち込んだのは誰だ？」今度は僕の隣の男——実のところまだ少年——が口を割った。「ファイが移動動物園をベンチの下に隠しています！」クラス中がどっと笑った。(中略) アイディア次第で学校だって楽しい所になるのさ！(S. 58f.)

ファレンティンは、小さな籠に入れた昆虫やカエルなどから成る移動動物園を教室に持ち込んだこともあったのだ。学校だってアイディア次第で楽しいところになると、うそぶいている。

ある時、ファレンティンの通う高等小学校と同じ建物に学生組合が入居してきた。学生達の頬の傷を目にして、ファレンティンたちはそれを格好良いと思い、縫い針を使って真似をしたらしい。

### (9)「消防隊ごっこ」

現代日本の子供たちも消防隊や救急隊が大好きな子は多いだろうが、ファレンティンの時代のドイツの子供たちも同じだった。

当時のミュンヘンにはまだ公的な道路清掃体制が整っていなかったもので、夏期は住民が自宅の前の道路を掃除して水を撒く決まりになっていた。そのためどの家にも長いホースがあったという。大人はホースのための出費をいやがったが、子供らはそのホースを使えば本格的な消防隊ごっこができるので歓迎だったらしい。本物のホースがそれも巻上機付きで使えるようになると、それまで母親から借りていたホース代わりの洗濯ロープは返却されることとなった。

これで全部そろった。ただ「残念なことに」けが人が欠けていた。誰かがけが人の振りをするなんてダメだ！ 中途半端では僕らは満足しなかった。やるからにはとことんやる。そこでガラスの破片をばらまいた。家の前、遊び場、物干し用の原っぱにも。草が生えているとガラス片は見えにくいから好都合なのだ。足を傷つけて出血する子供が現れるまでに1日とかからなかった。(S. 69)

これは救急隊ごっこのエピソードである。救急隊の白青の帽子は放出品を購入し、赤十字のついた腕章は母親に縫ってもらい、担架は自分たちで作る。問題は肝心のけが人がいないことだ。そこでガラスの破片を近所の野原にばらまいて、けが人を調達する。そのうち死人も運びたくなるのだが、こればかりは母親に泣いて止められて諦めた。

#### (10)「うさん臭い話」

悪臭をまき散らして、人々を困惑させて面白がるという臭い悪戯もある。その時、使われたのが家具運搬車の消毒に用いる硫化アンモニウムである。

店に保管されていた硫化アンモニウムが僕を魅了した。1899年のカーニヴァルで僕たちは山車——家具運搬車——をミュンヘン市街で引き回した。車に飾り付けをし、テーブルと椅子を持ち込み、ビア樽も載せ、僕ら自身は農民の扮装をした。ここまでは特におかしなことは何もないだろう。ただそれに加えて、ミュンヘン市内を走行する間ずっと硫化アンモニウムを垂れ流し続ける装置を搭載したのだ。(S. 72)

1899年のカーニヴァルの際の悪行である。家具運搬車を使って農民酒場を模した山車に仕立てるところまでは問題ないが、そこに硫化アンモニウムを垂れ流す装置を取り付けたのである。ミュンヘンの通り中に悪臭が満ちあふれることとなった。

同じく硫化アンモニウムにまつわるエピソードがさらに2つ語られる。それに吐瀉物の臭い、腐ったチーズの臭いのエピソードを合わせて、計5篇の悪臭ふん

ぷんたる章になっている。

### (11) 「下劣な行為」

この章には 14 のエピソードが下劣な行為としてまとめられている。下劣振りはいろいろで、あさましいもの、質の悪いもの、意地悪なもの、破廉恥なもの、等々。ここでは目の悪い店番のお婆さんをだまそうとした卑劣なエピソードを紹介しよう。

そこで、想定していなかった事が起きた。婆さんが天眼鏡を取り出して、まずはかなりの金額を示す値札、次に僕が差し出したわずかばかりの 18 ペニヒを観察し始めたのだ。婆さんの皺だらけの顔の表情が変わった。僕の中に少年詐欺師を認めたのか、それとも哀れな少年と思ったのかはわからない。いずれにせよ、この切手は 18 ペニヒではなく 18 マルクだと婆さんは説明し、僕に 18 ペニヒを返して寄越した。(S. 84f.)

本当は 18 マルクする高価な古切手に付けられた値札「18.-」の数字の後ろの点とハイフンを指で隠して「-.18」と思わせ、目の悪い店番の老婆をだまして 18 ペニヒで切手を手に入れようとしたのである。ところが、老婆がルーペを持ち出して値札をじっくりと確認したため、悪だくみはあえなく失敗に終わった。

### (12) 「心底好きなこと」

ファレンティンが心から楽しんだ事柄にまつわるエピソードを紹介している章である。粋な服装でダンスをして伊達男振ったことや初恋などの少し大人になってからのものから、幼い頃に最初にもらった楽器のこと、それから人形劇や芝居の楽しみに関するものまで 13 篇のエピソードで綴っている。

人形劇は子供をわくわくさせるものである。見る側でも、演じる側でも。――僕たちはピア樽の栓、それに母の繕い物籠から端切れをもらって、人形を自作した。舞台も作った。そしてアウの街角という街角に出かけて行って人形芝居を上演した。観客は身体をねじって大笑いをし、そして木戸銭を払っ



てくれた。笑いもお代も僕たちには同じくらい大事だった。売上金はきちんと山分けして、お菓子を買って食べた。——今もし誰かが僕に、あの頃はすばらしい時代だったかね、と尋ねるなら、答えは「そうとも！」以外ないだろう。(S. 100)

ファレンティンは子供の頃から芝居を見るのも演じるのも心底好きだったらしい。人形芝居に必要な道具を手作りし、アウ中の街角をくまなく巡業して回る。見物客は大いに笑い、木戸銭を払ってくれる。もらったお金でお菓子をかう。思い出してみても本当に楽しかった、としか言いようがないらしい。まさに楽園としての少年時代である。

### (13) 「最高記録」

この章には、自らが打ち立てたさまざまな記録を自慢気に語る4つのエピソードが収められている。

橋を渡るのはごく日常的な事である。僕がかつて成し遂げたことは非日常の事である。すなわち僕はヴィッテルスバッハ橋の欄干の上を歩いて渡ったのだ——洪水の時に！(S. 105)

ファレンティンは、大水の出た時にヴィッテルスバッハ橋の欄干の上を、バランス棒代わりに左右の手にランドセルを持って渡った。自分の他にこんなことをした者はそれまでいなかったろうし、将来も出ないことを彼は願う。

アウからハルラッヒングまでという相当な距離を、ファレンティンたちは輪転がし競走をしたこともある。今となっては覚えているのは賞品だけで、とにかくへとへとになってゴールしたそうだ。

1895年、ミュンヘンには競輪場がいくつもあった。(中略)そして自転車を持っている者ならみんなトレーニングをしていた。破産したせいで開けっ放しになっていたシャイレン広場の競輪場にこっそり入り込んで、ここで僕らは自転車競走をした。奔馬性結核に罹らなかったのが不思議なくらい奔馬の

ように僕はペダルを漕いだものだ。(S. 106ff.)

1895年当時——ファレンティンが12, 13歳の頃——競輪がとても人気があった。それぞれに最良の選手がいて、自転車を持っている少年たちは皆猛烈なトレーニングをしたらしい。奔馬性結核（進行が速い肺結核）になりかねないほどに、奔馬のように猛スピードでペダルを漕いだ、とファレンティンは書いている。

#### (14) 「パレード開催中」

パレードが好きなのは見物人がいるからだろう。射撃協会のパレードにブラカード係として参加したり、行進する軍楽隊の横を並んで歩いたり、ファレンティンはパレードする機会を逃さない。

長いブーツ——膝が隠れるほどの——が1890年に大流行した。(中略)僕は道行く人がみんな「僕のブーツ」に目を見張っていると信じて疑わなかった。

この幸福感を僕は決して忘れはしない！ 土曜から日曜にかけての夜、僕はブーツをはいたまま寝た。すごく長いブーツをはいたまま！ (S. 109f.)

ファレンティンが8歳頃のこと、当時流行していた膝が隠れるような長いブーツを作ってもらい、ブラカードを手に得意気に行進した。見物人がみんな自分のブーツに注目していると確信していて、とても幸せだったという。後の目立つのが大好きなコメディアンの素質がうかがわれるエピソードである。

僕は少年時代、軍隊に夢中になっていたと認めざるを得ない。通りを番兵が行進する日曜日には、僕は夢中になって軍楽隊と並んで歩いた。(S. 111)

軍楽隊の隣でファレンティンたちは一緒に行進する。19世紀末の少年たちにとって、制服に身を包み颯爽と行進する兵隊はあこがれの的だったことだろう。

#### 4. 当時の子供の情景について

以上、カール・ファレンティンの自伝的作品である『少年時代の悪戯』から原

文からの引用も交えつつ、収録されたエピソードの3分の1ほどを抄訳的に紹介してきた。1900年頃のミュンヘン郊外で繰り広げられた子供たちの遊びの情景が目に見えてきたのではないだろうか。

ファレンティンをガキ大将にして腕白小僧たちが心ゆくまで遊んでいる。雪や氷といった自然と親しみ、遊び道具を手作りし、近所の仲間達とともに全身を使って思う存分遊ぶ。犬やニワトリなどの身近な動物も彼らにとっては遊びの世界の一員だ。時に乱暴の度合いが過ぎて血が流れることもあるし、悪だくみが失敗に終わることもある。彼らの美学は、威勢の良さ、喧嘩早さなど、良く言えば生き生きとして生の喜びに満ちているが、悪く言えば粗野で軽薄であることは否めない。

危険な悪戯もだいぶしているが、それは勇敢であること、スリルを覚えることに価値を置いていたためだろう。いなせで粋な江戸っ子の感覚と通ずるものがある。ファレンティンが生まれ育った職人の世界<sup>20</sup>の価値観や美学も感じさせる。『少年時代の悪戯』が『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快な悪戯』を思わせるのは、職人の世界という両者に共通する背景もその理由の1つであるにちがいない。

しかし、この悪戯物語にはあまりにサディスティックで、「悪戯」では済まされないような行為も含まれている。<sup>21</sup> 実際にファレンティンはそこまで悪辣な悪戯をしたのか。ファレンティンの伝記作者ミヒャエル・シュルテは、『少年時代の悪戯』に書かれているサディスティックな悪戯について、本当にしたことなのか、それとも大袈裟に書いているだけなのか、それを突き止めることは難しい、しかし実行したかどうかは別にして、ファレンティンがそのような「悪戯」を嬉々として文章にしたのは事実だと述べている。<sup>22</sup>

後年ファレンティンは人間嫌いであられるようになってしまうが、少年時代の彼は、仲間を率いて先頭きっていろいろな悪さをしてかすとても活発な少年だっ

---

<sup>20</sup> 長女ギーゼラの伝記に掲載されている家系図を見ると、ファレンティンの親族のほとんどが各種の職人である。Vgl. Freilinger-Valentin (1988): S. 202f.

<sup>21</sup> 現代の感覚ではどうみても「悪戯」では済まされない行為もあり、そのためか、2020年刊行のペーパーバック版には、例えば手作りのギロチンで遊ぶのに生きたネズミを買ってきたエピソードなどは収録されていない。

<sup>22</sup> Schulte (1982): S. 10.

た。ファレンティンはそんな自らの子供時代を好んで思い出した。育った家、そしてアウという地域は、彼にとってパラダイスとして記憶されていたのである。

### 使用テキスト

Valentin-Böheim, Bertl (Hrsg.) (1986): Karl Valentin. Die Jugendstreiche des Knaben Karl. Mit siebzig Zeichnungen von Ludwig Greiner. München: Piper.

### 参考文献

Bachmaier, H./Faust, M. (Hrsg.) (1996): Karl Valentin. Sämtliche Werke in acht Bänden. Band 7: Autobiographisches und Vermischtes (Henze, S./Heizmann, A./Aier, M. Hrsg.) München: Piper.

Fischer-Grubinger, Annemarie (1982): Mein Leben mit Karl Valentin. Rastatt: Moewig.

Freiling-Valentin, Gisela (1988): Karl Valentins Pechmarie. Eine Tochter erinnert sich. Pfaffenhofen: Ludwig.

Paulsen, Alix (Hrsg.) (2020): Karl Valentin. Meine Jugendstreiche. Husum: Husum Verlag.

Schulte, Michael (1982): Karl Valentin. Eine Biographie. Hamburg: Hoffmann und Campe.

Schulte, Michael (Hrsg.) (1984): Das Valentin Buch. Von und über Karl Valentin in Texten und Bildern. München: Piper.

Schulte, Michael (Hrsg.) (1985): Karl Valentin. Gesammelte Werke in einem Band. München: Piper.

Schweiggert, Alfons (2013): Ein g'schpinnerter Teifi. Karl Valentins letzte Jahre. München: München Verlag.

Wendt, Gunna (2019): Liesl Karlstadt. Ein Leben. München: btb.

田辺秀樹(編)(1986):『ミュンヘン面白人物伝』白水社, („G'spassige Leut. Münchner

Sonderlinge und Originale“ Herausgegeben von Hannes König, Valentin Musäum.  
Gesammelt von Elisabeth und Erwin Münz. München: Wilhelm Unverhau, 1977. を  
元にした教科書版)

宮内伸子 (1988) : 「カール・ヴァレンティンの言葉遊び」, 東京都立大学大学院独  
文研究会『独文論集』第 8 号, 1-38 頁。

参考ウェブサイト

<https://saubande.com/> (Die Saubande – Valentin-Karlstadt-Förderverein e.V.)

## **Über die „Jugendstreiche“ von Karl Valentin Kinderszenen um 1900 in der Münchner Vorstadt**

**Nobuko MIYAUCHI**

Karl Valentin ist ein Komiker, der 1882 in der Münchner Vorstadt Au geboren und 1948 in München gestorben ist. Er schrieb über 400 Stücke; Monologe, Dialoge, Couplets und Sketche. Von den zehner bis zu den dreißiger Jahren des 20. Jahrhunderts war er besonders durch die mit Liesl Karlstadt zusammen gespielten Dialoge und Sketche sehr berühmt und beliebt. Er trat meistens in München, ab und zu aber auch in Berlin, Zürich und Wien auf der Bühne auf. In seinen eigenartigen Wortspielen besteht sein Reiz. Die zeitgenössischen Schriftsteller wie Bertolt Brecht, Alfred Kerr, Franz Blei, Hermann Hesse und Kurt Tucholsky schätzten ihn hoch.

„Jugendstreiche“ ist eine Art Autobiografie, die Karl Valentin großenteils während des zweiten Weltkriegs schrieb. Beim Verfassen waren für ihn Ludwig Thomas „Lausbubengeschichten“ das Vorbild. Im Vergleich zu Thomas Werk sind Valentins Streiche aber viel brutaler. Der Protagonist (Karl Valentin) erlaubte sich allerlei Freiheiten, doch wird er dafür meistens nicht bestraft. Man denkt dabei eher an die Geschichten von Till Eulenspiegel oder an Max und Moritz als an Thomas „Lausbubengeschichten“.

Im vorliegenden Beitrag wird etwa ein Drittel Episode aus den „Jugendstreichen“ vorgestellt, damit wir uns die Kinderszenen um 1900 in der Münchner Vorstadt vergegenwärtigen können. Da sehen wir Jungen, die möglichst affektiert und mutig sein wollen. Die Auer galten damals als streitsüchtig, unverschämt, roh, durchtrieben und leichtsinnig. Wir Japaner finden da eine Ähnlichkeit mit der Ästhetik der Edo-Leute. Positiv gesehen waren sie lebhaft, lebendig und lebenslustig. Negativ gesehen waren sie streitsüchtig, unverschämt, roh, durchtrieben und leichtsinnig. Das ist auch die Ästhetik der Handwerker. Daher ist es eben ein Grund, weshalb man an die Geschichten von Till Eulenspiegel denkt, wenn man Karl Valentins „Jugendstreiche“ liest.

Karl Valentin ist später Misanthrop geworden. Als Junge war er aber sehr aktiv. Er unternahm als Anführer zusammen mit Jungen aus der Nachbarschaft viele interessante,

lustige und manchmal brutale Streiche. Er erinnerte sich gern an seine Kindheit in der Vorstadt Au. Die Auer Jugendzeit war für ihn wirklich eine heile Welt.